

祭り 3回 夢の泣き笑い

宮村 一幸

1994年より舞台芸術学科は、全6コースをあげて、年1回の学外公演に取り組んでいる。出し物はシェイクスピアの「真夏の夜の夢」、劇場はプロの使うシアター・ドラマシティという豪華な企画である。’93年に学科長に就任された堺正俊（フランキー堺）教授の発案であり、尽力によって実現した。プロを目ざす若者たちに絵舞台を踏ませたいと願う熱意が実ったものである。私は初回から連続3回、演出として参加した、芸術監督を勤められる堺学科長の「第1回目だからオーソドックスに」という指導のもとに。そして、多勢の個性豊かな各コースの学生に囲まれ、更に年季の入った、筋金入りの個性豊かな指導教員に囲まれ、大いに力不足を思い知ったものであった。

2回目、尻ごみしている私に学科長は言われた「あれはプロセスだから」

そして3回目。「今回はセクシー&ワイルドでいきたいと思いますが」と打診すると「いいねえ、その次は歌舞伎調でどう？コロス風のセリフの勉強もさせなきゃね」と、学生諸君に様々な事を学ばせたいという意欲に満ちておられた。

今まで7月だった上演が、劇場の都合で12月になり、台本を秋浜悟史教授に書いてもらうという新しい展開になった。第1稿が上り、演出プランを練る。芸術監督に相談する事柄がいっぱい出てくる。あれやこれや質問のメモを握りしめ、お忙しい堺先生の出校を待つ。そんな矢先、6月11日、全く忽然と、逝ってしまわれた。悪い夢だった。第3回定期公演は、堺学科長追悼公演になってしまった。空しくメモを見つめて途方にくれる暇もな

く、最後の指示になった「セクシー&ワイルド」を掲げて、3回目の「夢」の実現に漕ぎ出した。

——混沌の宇宙から人間の目覚め——

1場・ト書《星が、神が、自由に大らかに宇宙遊泳していた、遙かな遙かな遠い昔を想像したい。……そして獣たちの、やがて人びとの登場。うめき、吠え、生の凱歌。全員による乱舞にまで。のぼりつめて、力つきて、それぞれが倒れる。眠りのように。しばらくして静寂の中から、一人の男が立ち上がる。アテネの大公、シーシアスである》

シーシアス：いつまで、夢はむさぼっていられるものだろう。夜にこそ目覚めよ、だ。寝ぼけ顔もあてやかなヒポリタ、私の大事のヒポリタ、ヒポリタ、アマゾンの女王さん…《呼びかけに何人かの女が起きかけるが、はたせない》のんびりしてはいられないよ、お嫁さんになってもらう日がいよいよ迫ったんだよ。

シェイクスピア原作、秋浜台本「ま、夏の夜の夢」は、現代感覚と軽快なセリフで味つけされ、このように始まる。

開幕前、暗闇の客席に吹きすさぶ嵐の音、地鳴り、海鳴り、動物のうなり声、咆哮などひとしきりの荒々しい音が遠のき、幕が上る。装置なし、上方からの光線数条、床に倒れ伏している人々は布で覆われている。音楽がおこり、布が蠢き、ブルーグレーのシンプルな衣裳の舞踊生とミュージカル生がゆっくりと踊り出し、演技生もからんでゆく。やがて後方から、舞台巾いっぱいの大きな茶色の布が数人に掲げられて前面へ。舞台は一瞬布に覆われ、客席最前列に待ちうけていた学生たちによって引きおろされ撒収される。大海原、大地の出現、と地球の

生成を象徴する場面である。イメージしていた厚手の布が、予算の関係で薄手になっているので風をはらんで扱いにくい。広い場所と扱う人の呼吸が揃わないと処理が難しい、稽古不足もはっきりしている、舞台稽古で成功するはずもないから何回もやり直す事にしようときめていた。ところが、その舞台稽古で、舞台上の3回生と客席の2回生の呼吸がうまく揃ってすみやかに回収され、いいスタートが切れた。

目覚めた大地からシーシアスが起き上る。「ヒポリタ」と呼びかけてひとりひとり起こしてみるが違う、違う、ようやくヒポリタが起き上る。

《復入り目の様式で劇お進行する。芝居の都合次第で、必要な人は起きたまま——》

ト書にあるように、必要な人から起き上ってくる。不必要になると退場する人と、伏して寝る人になる。シーシアスに呼ばれたお祭り係のフィロストレイトがアテネ市民に呼びかけながら退場すると、イジアスと娘ハーミアが、イジアスに呼ばれてライサンダー、デメトリアスが起き上り、恋のもつれがシーシアスに訴えられる。この時、後方に伏している女性群（8人の妖精）と男性群（6人の職人）はコロスとなる。

《個唱、群唱あり、すなわちコロスのに》

シーシアスがイジアスたちと退場。ハーミアとライサンダーは自分達の運命を嘆き、厳しい掟のアテネから逃げようときめる。セリフには、現代の若者たちに人気のある四文字熟語がちりばめられている。

ハーミア：まあ、腹が立つ！ 身分差別／情けないです、年令格差／我慢ならない！ 人権蹂躪。

ヘレナが起き上る。2人は彼女に駆落ちを告げ退場。恋するデメトリアスにそれを伝え、後を追う決心をしたヘレナを、8体のギリシャ彫刻と化していたコロスの娘たちが踊りながら阻む。娘たちは、後に妖精となる主に演技コースの人達である。学生の書いたレポートに、この場面の踊りのレベルを問うものがあつた。踊りがうまいこした事はないが、ここで必要なのは専門技術としての踊りではなく、コロスとしての演技力である。行手をさえぎり翻弄する娘たちは、恋人に拒まれ感情のゆれ動いているヘレナの心象風景の象徴でもある。ダンスの

先生に振付けはしてもらったが、あくまで芝居の一部である。専門分野にこだわりすぎると、一つの芝居としてのまとまりを難しくしてしまう。

《町の職人たち（全員男性）が乱入。女たちを蹴散らし、追い払う》

最後まで伏して残っていたコロスの男性群が起き上り、6人の職人となって女たちを退場させる。婚礼祝いの芝居をするために集まってきた連中である。リーダー格の大工クインスによって配役が読み上げられ、明日の夜、森に集まって稽古をすることになる。

《職人たち、そのままコロスと化し、次のメッセージを残し、役割交替する》

群唱：ところ変わってアテネ郊外、シーシアス様のお館の、とある森の中。しかるにこの森も、夜になれば魑魅魍魎、チミモウリョウ？ようするにお化けたちの支配する世界に一変します。夜の王様はオーベロン《一瞬出現》お妃はタイターニア《一瞬出現》ならば、タイターニアにつかえる妖精たちのダンスを、お届けせずばなりませんまい。

——森は生きている——

直線と曲線で構成された相似形のパネル、2枚づつ4層が、左右の袖から次々と出現、舞台を横切って動いてゆく。動きにつれて、パネルの重なり工合から様々な樹々の形が生み出され、森は刻々と変化する。パネルには車輪がついていて、ゴロゴロ、ガラガラ、右に左に行ったり来たり、美術生が人力で動かす。この森のパフォーマンス



ンスは、レポートで賛否が大きく分かれた。——森がゴ—と音を立てて動くさまに感動／美術生が押して出てくるのが新鮮／明るさの中で舞台転換が見られる珍しさ、面白さ、等々に対して——音が気になった、静かにできるはず／美術生がそのままの格好（自前の黒の上下）だったので夢がこわれる、せめて黒子か妖精にしては／転換の時間が長すぎる、等々——大がかりな装置の影で、這いつくばって動き回る先輩たちを目の当りに見ての驚きもあった。

車輪の音をおさえる工夫があるのはわかっているが、コストが高くなる。森は静かに息づく時もあれば、激しく騒めく時もある。今回は騒めく森にかけた。以前に、オーベロンが戯れるオーロラを出したくて、照明の先生に相談した事があった。出来る、しかし〇万円かかる、と言われて諦めた。予算あつての芝居である。衣裳ひとつ、黒子にしても妖精にしても調達するとなれば、材料と人手と時間がある。それもあるがそれ以上に、美術生の素顔も見てもらいたい。いわゆる裏方の仕事をする人は、表に出たくないと言う人も多い。プロになったら彼らは舞台に姿を現わさないだろう、せめて学生時代、ひとつの芝居をつくり上げる仲間達と一緒にライトに当たってほしい。今回は音響効果生も客席の後方に陣どって、舞台と客席のテンションを計りながらのオペレーション、お客さんに仕事ぶりを見てもらった。専門分野ごとに作ってきたものが、1つの舞台で合体するのだから、イヤでも交流する。小道具係として仕事をしていた人のレポート——本番中の舞台袖で色々な顔を見た。お互いの衣裳をふるえる手で直し合う舞踊生、これからステージにとび出していこうとする役者たちの真剣なまなざし、そんな様子を見ていると、こちらも心臓の音が高まってゆきました——

森の動く場面では、踊り手2人がしゃべり手にもなって、セリフが加えられた。

I：どうやら森が動き出したいようです。

II：せっかくの機会ですから、しばらく舞台転換を御覧下さい。

I：全国より選抜された裏方、総勢〇人が、私たちのステージにかかわっています。

II：ところで、森が動くという有名なお芝居がありましたよね——

ダンシネインの森だの、お化けの森だのと世間話ふうのおしゃべりの間に、舞台転換が行われた。レポートで、今回はアドリブのセリフが多かったと感じた人が何人かあったが、台本がそのように日常的なのであって、役者が勝手な言葉を言っているのではない。アドリブとしてOKしたのは、上記のセリフの中では「総勢〇人」の数字だけ、毎回本人が創作し、最後は783名と、お客さんの数より多くなった。

ようやく森は落ちついた。樹々の後ろの円いトンネル（レンズ）の向こう、遠見の丘の上にギリシャ神殿が望まれる。タイターニアの妖精たち、パネルの後より湧き出るように出現し、歌と踊り。従来の妖精の他に、蠅螂の斧、たんぼぼの綿毛、蜜蜂の針、なめくじの舌が加わり計8名となる。女王のそばには、前2回には出なかったインドの少年を出場させた。縫いぐるみのオチンチンを付けたフリチン姿のつもりだったが、少年役の女性の恨めしげな眼差しの訴えに負けた。その代りに「ねえ、私かわいい？私きれい？」としつこく甘えるセリフを付け、タイターニアが「かわいいわあ〜」と抱きしめるシーンになった。

《ストップ・モーションの妖精たちの回りにバック、ワッと飛び出す。複数のこと》

バック連：ご披露しましたバック分身の術。私バックめは1人で複数。森のいたずらっ子……

1回目は1人、2回目は6人、“複数”と指示のある今回は5人とした。その中の1人はとびっきりの太っちょだが身の軽い人物で、バック連は、この太い芯を先頭にして組み立てられた騎馬戦の形で、塊として走り出る。

「バック分身の術」を合図に各人の得意のワザ、回転や跳躍を駆使し、パッとほどけて5人となる。彼らの登場は、この型を基本にした。

妖精王オーベロンが太鼓橋を押して登場。前2回は大階段を使い、舞台に高低差をつけた。今回は、キャストとストッパーの付いた半円形の太鼓橋をつくり、これをオーベロンの遊び道具に設定した。原則として出し入れは彼自身が行う。客の目にも判るように自分の足でス

トッパーをかけ、遊び道具である事を示すが、パック連や4人の若者たちも利用する。登ったり、駆け渡ったり、飛び乗ったり、飛び降りたり、下を潜り抜けたりと自在である。

オーベロンという名は、伝説の中で森の小人王であるとか、ジュリアス・シーザーと妖精の間に生まれた息子であるとか、誕生の時に招かれなかったフェアリーの怒りによって、3年目からは成長しなかったとか言われている人物である。今回はそれに因んで、彼の幼児性を強調した。子供っぽく、堪え性のない彼は、タイターニアの大切にしているインドの少年が欲しくてしょうがない。そこで魔法の花の汁を使う事を思いつく。その花の汁を、眠っている時まぶたに垂らされた者は、目覚めて初めて見たものに、それが何であれ、身も世もなく恋いこがれてしまうという。その“恋の三色すみれ”を彼はパック連に取ってこさせる。

パック連：かしこまりました。地球をひとめぐり、パックにはたったの40分。

《すぐさま、走るポーズの分解写真的構図》

そんな森の中へ、デメトリアスとヘレナがやってくる。恋する男に邪剣にされる美しいヘレナを見たオーベロンは、すっかり同情し、花の汁の効力を使うようにパック連に言いつける。

《森の中。別の場所ということになっている。妖精たちが大勢で、タイターニアのために花床を構築中》

タイターニアは舞台奥のレンズの中。8人の妖精たちがせっせとベッドつくりを励んでいる。中央に持ち出し



た円い花の芯のまわりに、花びらを運んで来ては差してゆく。大きな花の中に包まれるようにして女王は眠る。パネルの樹が扉のように花床を隠す、天の岩戸である。オーベロンが現われ、パネルの奥でタイターニアの目に花の汁を垂らす。見えない世界からの聞こえてくる音、ポチャン！花の汁の効果音。これがタイミング良く出たり出なかったり、しくじった学生より周囲の者が慌てているのが判る客席。たまたま、機材のそばでトラブルを見ていて、操作していた人の落ちついた対応に感動したとのレポートもあった。

——混沌の恋人たち——

閉じている天の岩戸（パネルの樹）の前、中央にオーベロンが置き忘れていった太鼓橋。森の中で道に迷い疲れきったライサンダーとハーミアがやってくる。2人は慎みのため離れて眠ることになり、ライサンダーは太鼓橋の袂に、ハーミアは上手パネルの裏より6尺の脚立を使って顔を出し、枝にまわりつくように木の上で眠る。アテネの衣裳だけを手掛りにヘレナの恋人を捜していたパック連は、眠っているライサンダーをてっきりその人物だと思い、花の汁を垂らしてしまう、ポチャン。恋しいデメトリアスを追って彷徨っていたヘレナが、そんなライサンダーを見つけて揺り起こした。目覚めた彼は見るなり恋におち、驚くヘレナを追ってゆく。

とり残され、悪夢にうなされるハーミア。不気味な夜の森、静寂の中に獣の唸り声、甲高い鳥の叫び、夢の怖さと森の怖さにおびえライサンダーを呼ぶのだが、誰も居ない、じっとしてられず捜しに出かける。

またもや森の大移動。今度は左右のスライドに加えて、上から舞台巾一杯に樹々の梢のパネルをつけたバトンが4本、何度か上り下りしてやがて堤となる。堤の後から職人たち、梯子を使って乗りこえながら舞台前面へ。

クインス：あると思えば、そこにあるようになるのが、お芝居の約束事さ。

芝居をやる方も観る方も、想像力で補う約束事をセリフの中に盛り込みながら、彼らは素人芝居の稽古を始める。遅刻の常習犯ボトムを待ちかねている所へ、ボトムがロバになって登場。前回のロバ頭は、舞台上でパック

連に寄ってたかって被せられたが、今回は森の変化の間に裏で被って出てくる。学外に発注して造ってもらった大きな頭と大きなお尻で、耳と尻尾が動く仕掛。

職人たちはびっくりして逃げてしまう。強がって大声で歌うボトムだが、身体の半分もある頭が重くて真直ぐ歩けない、ついに四つ足歩行で嘶く。その声を聞きつけて目をさましたのはタイターニア。美しい？歌声にひかれ天の岩戸が開き、ロバのボトムを見るやいなや「愛しています」と誓い始める。戸惑っているボトムの前に、女王にかしづく妖精たちがご挨拶。たんぽぽやなめくじなど名前にちなんで、美術生がデザイン・制作した衣裳で踊り、自己紹介をする。愛想よく応じているボトムの尻尾にリボンを巻きつけた女王は、早々に自分のあずまやに誘ってゆく。

パック連の間違いを知ったオーベロンは、自ら花の汁をデメトリアスの目に垂らす、ポチャン。そこへヘレナがやってきた。目覚めたとたんに口説き始めるデメトリアス。ヘレナは2人の男からの突然の求愛に、後から皆に追いついてきたハーミアもぐるになって、自分をからかっていると思ひ込む。ハーミアの方は、ヘレナが2人の男を唆したと感違い。さあ四つ巴の喧嘩が始まった。

操り人形／背高ノッポのノッペラボー／チンチクリン／ジャジャ馬／ばか力／短気で短身／でぶっちょ／寸足らず……と悪口の応酬のあげく、男たちは決闘だあと飛び出し、女たちも後を追う。パック連の「へのま」のおかげで若者たちは大混乱におちいってしまった。頭をかかえて太鼓橋に蹲る大弱りのオーベロン。



オーベロン：まずいぞまずいぞ、目もあてられぬ。一切合財なかった事にしよう。世界を作り直すのだ！急いでぬげたまの夜のとばりを降ろせ。

都合の悪いものには蓋。やり直しの名案を思いつき、がぜん張り切って若者たちの仕末をパック連にまかせたオーベロンは、インドの少年を浚いに行く。瞬間の暗転から紅紫色の照明になり、月明りに浮ぶ遠見の神殿とオーベロンは消える。

暗い霧の中を彷徨う若者たちを、うまくカップルにしてやろう、だが楽の前には苦があると飛び回るパック連。衣裳の飾りがホテルのようにボウツと光る。それ、ライサンダーがやってきた。「パック変身の術、岩」のセリフと同時に、集まって巨岩となったパック連の背中の上を、滑り落ちながら乗りこえてゆくライサンダー。「倒木」のセリフで、5人は両肘両膝を床に着いて連らなり、倒木の形を造る。揺られ突き落とされながら渡ってゆくデメトリアス。「沼」で床にのたうつパック連。踏み込んで足首を掴まれ、スカートを引っぱられ、引きづられ、難渋するヘレナ。「茨のしげみ」では、手足を広げて千手観音の形でうごめく。からまれ、髪の毛を掴まれ、ひっつかれながら潜りぬけようともがくハーミア。へとへとになりながら4人の若者は障害物をのりこえた。パック連は、愛し合う2組のカップルをつくり、上手のパネル裏に眠らせ、やさしく子守り歌を唄う。

4人の貴族の若者たちのうち、女性2人は“チビで色黒”と“背高ノッポで色白”とされているが、男性2人はこれと言った特徴が示されていない。原作ではどっちがどっちでもいような書かれ方だ。強いて捜せば、ライサンダーは自分の髪の毛で編んだ腕輪や指輪をプレゼントしたり、誓いながら涙を流すとある。そこで、涙、涙で泣きながら口説くライサンダーと、その反対というだけで、笑って、笑って、笑いながら口説くデメトリアスが登場した。実は初代デメトリアス役の学生は、普段から大声でよく笑う愉快な人物だった。活舌が少し悪く“おアヤヤ母親にお謝まり”というのが“おヤヤヤおヤおヤ……”に聞こえる。しかし時間を惜しまぬ熱心な稽古で、笑い上戸のデメトリアスが生まれた。今回も、泣き上戸と笑い上戸の演じ分けを踏襲して、ややこしい森の

中の4人の追っかけっこを少しは分かり易くした。だが、分かり易くしたくないと言うのも本音で“若いモンは、何のかのといってもコロコロと変わる、どっちがどうとも言いがたい”と言ってるような原作者の皮肉な感触が好きで、捨てきれない。

2代目のヘレナも笑いのうまい学生だった。稽古の始めの頃は、腰のひけているような姿勢の悪い冴えないヘレナだった。ある日、ハーミアとの喧嘩の場面で「なるほどあなたは手が早い、だけど足なら私の方が長くってよ」と、足を天高く振り上げさせ、ついでに大声で笑わせた。彼女はいつまでも笑い続けた。きけば高校時代から“腹筋笑いのナントカサン”と呼ばれていたという。この場面で自信がついたのか芝居がのびのびとだし、チャーミングなヘレナに変身、ついには演技賞5人のトップを受賞した。1つの能力から別の能力が引き出された例である。

——欲しいものを手に入れて——

舞台奥レンズの中ではパントマイムがくり広げられている。タイターニアはロバのボトムに夢中で、すぐるインドの少年に見向きもせず邪険に突き放す。しおれている少年を抱きとり浚ってゆくオーベロン。妖精たちによ



って押し出された花のベッドに、タイターニアは花で飾り立てられたロバのボトムを誘い込み、からみつき、大胆なラブシーン。

タイターニア：その美しい大きな耳にキスしちゃおう。チュッ チュッ ベトッー あゝこんなに愛して

るのよ、恋して、もう、夢中！《2人とも眠る》

このシーンになると女の先生方からクレームがついた。エゲツナイ、ロコツ、もうイヤイヤとおっしやる。学生の家族も見にくることだし、もう少し何とか……。タイターニアはなりふりかまわず必死で演じている。フランキーさんならどう言われたらだろうか。

あまりのていたらくに、オーベロンはタイターニアの目に呪いを解く花の汁をかけてやった、ポチャン。少年を手に入れたオーベロンは子供っぽさが消え、目覚めたタイターニアと仲直り、大人のカップルとして悠々と踊る。太鼓橋の上でインドの少年が澄んだ声で愛の歌を唄っている。騒がしかった妖精の世界も落ちつきを取り戻した。森の樹々も静かにゆっくりと動いて安定する。

朝の光の変化。シーシアス、ヒポリタ、イジラスたち狩の姿で登場。下手のパネルが捌けると2組の若者たちが眠っている。上手で眠りについたが、パネルの移動と共に移っていたわけである。仲良くカップルになっている4人を見つけたシーシアスは、角笛で目を覚まさせる。イジラスは裁きを乞うが、若者たちのしどろもどろの言い訳、説明、身振り手振りの夢物語りに大笑いのシーシアスとヒポリタ。一緒に3組の結婚式をあげようと、全員太鼓橋を渡って町へ帰る。

——職人さまのお出まし——

黒幕の前、職人たちが衣裳を着かけたり、道具を直ししたりと芝居の準備をしながら、ぞろぞろと登場。お化けになったボトムの身の上を心配している。主役の彼が不在では芝居にならない。そんな所へ、ロバ頭を外してもらったボトムが、とてつもない夢の出来事に興奮さめやらず、意気揚々と帰ってくる。さあ、張り切って行こうぜ！主役の上機嫌に皆のテンションもあがって、ようやく結婚祝いの場へと辿り着いて来た。

黒幕が開き、中央レンズのみ、遠見なし、天井に垂れる半円形のジョーゼット、森の樹は舞台袖に垂直側のラインを見せて宮殿の柱と化している。お祭り係が出し物を紹介する。この役は何故か誰もやりたがらない、オーディション時の希望者は毎回ゼロである。芝居の始めにちょっと出て最後にちょっと出る、なるほどセリフは少

ない。半年間の授業を過ごすには退屈なのはよくわかる。現場に居て観察しているだけでも勉強になるとは言うものの、授業時間以外の稽古にまで付合う気にはなりにくい、欠席が多くなる。配役で出席率が変化するのは毎度の事だが、芝居は稽古に時間がかかるものである。集まって稽古をしているうちに、それぞれが影響しあい、思いがけない自分を発見したり、発見されて可能性は広がってゆくのだ、稽古に出て来ない人には手の施しようがない、残念だが現実である。芸術は自由平等ではありえない、不自由、不平等、そして若干の博愛かな。

稽古は不思議なものだ。長い稽古の間にチームの呼吸が合い、相手のノリに乗せられて相乗効果が生まれ、芝居は変化する。3代目デメトリアスのレポートによると——練習すればするほど面白くなってゆき、自分でも驚くほど学校に通い、練習にはげんだ。仲間意識あり、ライバル意識あり、皆とあのようにすごせて楽しかった——

若者4人組は実によく稽古をした、いつもメンバーが揃っていた。稽古場に入って必ず相手役に会える、これほど心強いことはない。そして稽古量の差は本番で歴然と出る。——こんなに練習したのは初めてだが、気がつくのが遅く、稽古不足を感じた——と、かなり稽古にはげんだ人たちが言っているのは面白い。

職人たちの劇中劇は、祝祭劇であるこの芝居の重要な場面であるにもかかわらず、いつも付録のような感じで受けとめられる。森の大混乱がようやく円く納まり、お客さんはヤレヤレこれで終りかとホッとしている。そんなところへ、脇役だと思っていた人物がまたぞろ出てくる「なんや、まだあるのか、お疲れでしょうが、もう一度気を取り直してもらわねばならない。

広い舞台全部職人たちのもの、真正面レンズの中から堂々の登場である

クインス：まずは、役者の自己紹介

ボトム：なにを隠そう機屋のボトム。われこそは、天下の二枚目、ピラマス。

フルーツ：ふいご直しです。フルーツです。まごうかたなき隠れもない美貌の姫シスビー。

主人公2人はギリシャ劇風の大きい仮面をつけ、大ぶりで厚底のコトルノスを履いている。この扮装での動き



はかなりの制約を受ける、稽古の早い時期から着装して慣れてもらった。短い場面だが、仮面での見せ方を身につける稽古時間は長かった。セリフは大巾に消して、身体でしゃべる稽古が続いた。

親の反対で結ばれぬ若者の恋は、より激しく燃え上る。隔てる堀役の必死の妨害で、顔も見合えぬ2人は墓地でのデートを約束する。月光役が照らし出す墓地、照明は絞られ舞台中央のみ。そこには、何かを喰べ、口を血だらけにしたライオンが寝ている。先に来たシスビーはそのライオンに腰をかけた。ガオーッ。驚くシスビー、コトルノスをぬいで投げつけたり、行きがかり上ライオンを踏みつけたりと大わらわ。茨を振り回す月光に助けられ、マントを残して逃げ去る。やがて、デートの喜びに胸おどらせてピラマスがやってきた。そこで見たものは、引き裂かれた血だらけのマントとコトルノス「いかにしてかくなりつるぞ」恋人がライオンに喰べられたと思ひ込んだピラマス、嘆きのあまり声を失い、パントマイムでの表現となる。残されたピンクのコトルノスを強く抱きしめた彼は、いとおしむように床に置き、自分のグリーンのコトルノスで両側から挟んで並べ置き、さらに、あたかもシスビーの寝姿に掛けるかのようにマントをかぶせる。やがて彼は剣を引き抜き、胸を刺し、コトルノスを枕に横たわる。月光もしおしおと退場。

シスビー：《再々登場》眠っておいでなの、いとしい人？え、お亡くなりなの？…ピラマス、起きてよ、口をきいてよ…《ピラマスの顔を引き寄せ》死んでしまったの、まさか？…

なんということ。息絶えた恋人を見つけたシスビーは悲しみのあまり「アア〜」と悲痛な叫び声をあげて仰向けに倒れる。と、頭が、天に向いた仮面が地に着きかけるやいなやムックリと起き上がるが、また「アア〜」と倒れ、すぐに起き上り、またまた「アア〜」。やがて、嘆きのシスビーは言葉もなく、いとしいピラマスをうち眺め、ついで、彼の手から剣をもぎとり自分の胸に。ゆっくりと、2組のコトルノスを枕に、ピラマスと折り重なって死ぬ。2人の身体はパラレルに横たわり、大きな仮面が同じ角度に並んで、なぜか可愛い。明りが少しづつ暗くなる。悲劇は終わった。

客席の後方よりバック連、ローソクを手に手に静かに登場。

バック連：あとの祭りでした。ドンチャンさわぎの表があれば、かげに潜んで手に汗にぎる裏もある。つたないお芝居で皆様、お気に障ったとしてもそこはそれ、ここで眠って夢を見た、そういうわけかとお許しを。芸道出世が願いです。ますます精進誓います。もしもこの上お叱りなくば、もう一つおねだり、それだけが命です。皆様、拍手を。

祭りは終わった。お客さんの拍手にピラマスとシスビーは生き返る。バック連舞台上に上り騎馬を組み、パツと分解してバック転、職人たちを去らせ「レッツフィナーレ」と叫んで消える。全員が舞台になだれ込み、結婚行進曲のメロディによる大合唱のフィナーレ。

さてここから、もうひとつのフィナーレが始まった。六面体の大きなミコシが舞台中央にデンとすえられ、懐かしいフランキー堺さんの思いっきりの笑顔や、写楽風の似顔絵がグルグルまわり出す。氏の得意だったラグタイムのジャズが軽快に流れ、2回生たちも舞台にかけ上り、全員がワッショイワッショイと踊りまわった。この企画は、芝居と別だてのものだから稽古が少なく、舞台稽古、昼の部、夜の部と動きは全て変化した。慣れない学生たちが戸惑ったのも無理はない。レポートでも、失敗だったのではないかとの悔しさや、稽古不足の反省が多かった。シェイクスピア劇とミコシの取り合せを疑問に思う人がある一方では、追悼公演なのだ、この公演を捧げようという気持ちが強く感じられ感動したという人

もあった。

今、ミコシを囲む若者たちと、フランキーさんの「あ〜も^も・もうすぐ終る」と流れる声を思い出しながら、学生を愛し、ご自分の多才なノウハウを次世代に伝えようとされた氏の心意気を、改めて懐かしく思う。氏は笑いつくりの妙手でもあった。数ある戯曲の中から選ばれたのは「真夏の夜の夢」という喜劇。だが作者は巨匠シェイクスピアであり、世界の古典である、難かしいという考えが一般にあるらしい。レポートでも——終始笑っていたがよいのだろうか／なぜ笑いをとろうとするのか／私たちはお笑い芸人ではない——などの意見があった。笑いを後めたいと思う気持ち、低いものと見なす気持ちが不思議にある。古今東西、笑いは魔を払い、幸を呼ぶ。下品な悪ふざけや、失敗して失笑をかうのは困るが、喜劇を演じて笑ってもらえれば冥利につきる、何の遠慮がいるものか。ドンと来い、ドンと来いだ。

狙った笑いがうまく客席から返ってきた時、芝居は盛り上り、呼吸があい、間が^{イキ}掴める。観客との交流で育つ、これが生の舞台の醍醐味だ。ラッキーなことに、素直に反応してくださる親切な、上質のお客さんに恵まれている舞台芸術学科である。

あ〜も^も フランキーさん

お元気ですか

笑っていただけでしょうか

あ〜も^も ……

——幕——

